

[研究ノート]

## 清末留日学生と中国における近代心理学の受容

龔 穎（倫理研究所特任研究員）

長い歴史の中で、心理学は哲学の母体に包まれ、心理学的な考えが哲学思想と密接に絡み合っていた。西洋においては、その上、心理学が宗教からの影響を強く受けていた。特に西欧における封建社会においては、学問全体がキリスト教神学からの制限を受けていたため、心理学も余儀なく「神学の侍女」にさせられたのである。ルネッサンス以降、西洋社会は、資本主義社会に入り、19世紀になると、哲学の中の一部としての心理学即ち哲学的心理学（「精神哲学（Mental philosophy）」ともいう）が、すでに顕著な発展を遂げ、また教会の宣教活動にも助けられながら、その影響が東アジアまで広がったのである。

19世紀の末期より、心理学が徐々に哲学から独立して「近代心理学」という新たな学問に変身し始めた。ドイツ生理学者、心理学者、哲学者であるヴント（Wilhelm Wundt, 1832～1920）は、1879年にドイツのライプツィヒ大学で世界初の心理学を研究するための専用実験室を創立した。このことは、心理学が一つの独立した学問分野として認められた象徴的な事件だと思われる。1881年、心理学実験のレポートを発表する場として、ヴントが『哲学雑誌』を発刊した。ヴント自身は生理学者であったため、当時の心理学研究も生理学より変遷してきたことは言うまでもないであろう。このような状況と関連させながら考えると、幼年期の「心理学」という学科は生理学や哲学などの他の関連分野に強く依存していた、ということが言えよう。

その後、米国、オーストリアなどの国の心理学者たちも心理学を哲学から独立させることを求め、積極的に努力していた。

19世紀の後半から、古い東洋社会も「伝統から近代へ」という大きな社会変革を経験し始めた。この変動は学問や文化の発展に新たな活力をもたらした。日本では、1868年の明治維新以降、ヨーロッパとアメリカの科学技術が積極的に導入されると同時に、西洋の学問や思想も流れ込んだ。それで、心理学が哲学から独立しようとした動向も同時に伝わってきた。このような背景の下で、近代心理学が日本に伝来し、比較的短い期間のうちに「心理学」が一つの独立した学科に成長してきたのである。

中国においても、いわゆる「晩清」（19世紀半ば頃から）以来、社会は「三千年未曾有之大変局」を経験していた。この大きな社会の変動の中では、人々の思想や考え方の変化が特に大きく、この思想上の変化がその後の中国社会に決定的な大きな影響を与えていた。「近代心理学」という学問の導入と発展もそれらの重要な変化の中の一つであった。

近代心理学が中国に導入された初期の象徴的な出来事は、原著の前半部分だけでありながら、ヘヴン著『心理学』（Mental Philosophy）の中国語訳の刊行だと思われる。この書は『心靈学』という中国語訳名が付けられ、牧師であった顔永京（1838～1898）によって翻訳され、1889年（光緒15）に刊行されたものであった。しかし、このアメリカルートより伝来されてきた『心靈学』は中国における心理学展開史上にそれほど大きな影響をもたらして来なかった。

それに比べれば、服部宇之吉の講義録『京師大学堂心理学講義』（1902～1903までの間に刊行）をはじめとした日本人の手による心理学関係の著書が多く翻訳され、中国における現代心理学の展開史上に重要な影響を与えた。それだけではなく、20世紀の初期においては、中国人が編著した心理学関係の

書物も主に日本のものを参照したのである。西洋の心理学が中国に伝来された過程においては、日本がその架け橋の役割を果たしたのであった。

以上のような大きな流れに関しては、しばしば言及されてきたが、近代中国における心理学の受容と明治後期日本における心理学との交渉・交流の詳細についての調査・研究はまだ十分に行われていないのが現状である。従って、本稿は研究ノートにしかねないが、中国の清朝末期に東京帝大哲学科に留学していた清国留学生の心理学受容に関する史料を整理し、またそれに初歩的な検討を加えてみたい。